

近代日本の「東洋学／中国学」の人々

東北大学 朱 琳

1、「東洋学」とは

「東洋学」(Orientalism／Oriental Study の訳語)は、「東洋」を研究対象とする学問であり、明治以前には存在せず、十九世紀末に明治日本の社会的要請と密接に関連して誕生したものである。日本人の手で再構築された「東洋学」はどのような対象範囲と構造を持っているのか、また、日本自身が「東洋」のなかでどのように位置づけられ、あるいはそこから峻別され距離をとっているのか、大変興味深いものである。

近代学問体系のなかで、最初に History を確立させたのは西欧なのであり、日本・中国などの「非西洋」には歴史を叙述し史書を編纂する伝統があったものの、それは政治あるいは文芸と一体となっていた。明治初期、日本の歴史は「和漢文学科」で教えられたが、ランケ (Leopold von Ranke) の文献実証法を受け継ぐ弟子リース (Ludwig Riess) が帝国大学に招聘され西欧の歴史を教える「史学科」が設立された後に、これに対抗する形で史学の科目に「日本歴史」が加えられ、その後「国史学科」が成立した。歴史の分野の問題として、当時の人々は西欧諸国を中心とする世界史(「万国史」)の叙述に違和感を覚える一方で、儒学の価値観に基づく王朝交代・治乱興亡を中心とした中国風の歴史の説明にも満足していない。むしろそれらを相対化するために、対抗して「東洋史」が構想されるようになり、そのため「満鮮史」・「塞外史」が最初からとりわけ重視された。いわば「東洋」は二つの脱中心化の結果生まれたものなのである。さらに、西洋でも東洋諸国でもなく、日本にこそ西洋を凌駕して「東洋学」を発展させる必要性と可能性があると強い使命感を示す学者が現れた。

東洋の事は東洋の人で研究するのが便宜でもあり至当でもあるに、還つて西洋の学者に先鞭をつけられて東洋学の領土が政治界に於けるが如く侵略せられ蹂躪せられたと観ずれば亦奮慨に堪へぬ次第である。只今東洋の諸国は衰へて死にくつ〔ママ〕ばかりの有様であれば、此等の国々の学者に向つて斯の学の振興を望むのは或は無理な注文であるかも知れぬ。然し我が国の如き(中略)殊に東洋学に於ては彼を凌駕してその欠陥を補ふ程の豊富がなくてはならぬ。(中略)茫漠たる此の学界を見渡すに未だ西洋学者の手をつけない題目もあるし、よしや手をつけても未だ研究の足らぬ学科もある。(白鳥庫吉「戎狄が漢民族の上に及ぼした影響」『東洋哲学』8-1、1901年1月)

結果的に西欧近代の学問体系を受容した明治日本は、伝統的な「漢学」を打破した上で、西欧の「東洋学」へのライバル意識を燃やしつつ、その科学的・実証的方法を積極的に摂取し、「非西洋」・「非日本」の独自の「東洋学」を発展させてきた。言うまでもなくその

中心的な役割を果たしたのは学風が異なる東西両京の帝国大学——東京帝大と京都帝大であるが、初期の段階では、東京帝大と緊密な関係にあった学習院（帝大出身の教員や両校の間を兼任・転任する教員が多かった）も東のもう一つの中心であった。

以下、学習院・京都帝大・東京帝大という順で「東洋学」（以下、主に「東洋史」）の成立と発展をたどってみる。

2、学習院の「東洋学」——那珂通世・市村瓚次郎・白鳥庫吉

日本における東洋史教育発祥の地は学習院である。

那珂通世（1851-1908）は漢文で『支那通史』（1888-1890 年、全 5 冊）を著し、西洋史学の古代・中世・近世の三分法を初めて中国史に導入した。1891 年に華族女学校（のちの女子学習院、在職期間は 1893 年まで）の教授に就任し漢文の授業を担当したが、1893 年に高等師範学校の「支那歴史」の講義を嘱託され、翌年に同校の教授に就任した（その後、第一高等学校教授、東京帝国大学講師をも兼任した）。

1894 年に、高等師範学校校長嘉納治五郎が主宰する中等学校学科課程を研究調査する委員会の分科会で、那珂は中等学校の外国歴史を西洋歴史と東洋歴史とに分けることを提議したところ、賛成を得て「東洋史」という科目が誕生した。それに則した教科書として、市村瓚次郎『東洋史要』（上・下、1897 年）、桑原隲蔵『中等東洋史』（1898 年）などが上梓された。

市村瓚次郎（1864-1947）は白鳥庫吉とともに東京における草創期の東洋史学の基礎を築いた人物である。『支那史学一斑』と題する卒業論文で帝国大学古典講習科を卒業した後、1887 年に林泰輔らとともに東洋学会を創設、『東洋学会雑誌』を創刊した（～1890 年）。大学卒業の謝恩会の席上、市村は次のように将来の抱負を述べた。

東洋の学問は、猶ほ未開拓の所あり、支那は日本に比すれば、其の研究の行き届きたる所はあれど、所謂支那流の研究にて、間々粗漏の所あるを免れず、（中略）又支那の歴史は、歴代の正史その他の史類が具はりて、頗る完全なるが如く思はるれど、緊要の記事割合に少くして、その要領を捉ふることまた容易ならず、故にこれを取捨折衷して簡にして要を得たるものとならざるべからず、是れ等の任に当るものは固より自ら任ずるの重きを要す。（瀧川亀太郎「序」『市村博士古稀記念東洋史論叢』、富山房、1933 年）

自らの抱負を実現するために、市村は漢学の素養を基盤に中国史全般の造詣を深めることに努めた。早くも 1888 年に学習院に奉職した市村は、「支那歴史」・「漢文」などの授業を担当し、1897 年に歴史地理副課長となった。1898 年に東京帝大に転任した後も、学習院教授を兼任し 1908 年まで在職した。日清戦争後、「支那」から「東洋」への彼の視線の拡大は、『支那史』（1888-1892 年、全 6 巻、共著）・『支那史要』（1893-1894 年）から『東洋史要』（1897 年）への書名の変化からも読み取れる。中国中心の伝統的な歴史の書き方

を改め、中国をあくまでも広大なアジアの中の一部として捉えようとする試みが反映されているのである。

白鳥庫吉（1865-1942）は日本の東洋史学の創始者の一人であり、学界を彩る多くの人材を育てた人物である。千葉中学校で那珂通世・三宅米吉に教えを受け、東京帝大に新設されたばかりの「史学科」に入学し、リースに学んだ。その最初の卒業生となると同時に学習院教授となり、1911年に東京帝大に転任した後も1921年まで兼任し、明治・大正期の学習院の歴史教育に最も枢要な役割を果たした。

学習院の教育体制の改革に着手した第四代学習院長の三浦梧楼は、歴史教育、とりわけ日本歴史と東洋歴史を重視し、九年の授業時間のなかで歴史の授業を最も多くした。それは「歴史を以て人物の陶冶を図る仕組であつた」（白鳥庫吉「学習院と文部省」『学習院物語』稿本、1942年）。これにより、中等学科で二年級以上の学年に「支那歴史」（市村担当）、高等学科では1890年に日本で初めて「東洋諸国の歴史」の科目が設けられた（市村は中国史、白鳥は中国以外の東洋諸国史担当）。実のところ、尋常中学校における「東洋史」科目の設置を定めた「尋常中学校歴史科ノ要旨」（1894年）より四年も前から学習院において東洋史の授業がすでに確立されたのである。三浦の学制改革について白鳥は、「世間では未だ歴史とはどんなものかといふ觀念さへない時代に既に学習院では斯の様に歴史が教授科目の最も重要な地位を占めたのであり」（白鳥庫吉「学習院に於ける史学科の沿革」『学習院輔仁会雑誌』134、1928年）、「三浦將軍は我国東洋史学の生みの親とも言へる訳である」（前掲「学習院と文部省」）と後年回想している。

3、京都帝大の「支那学」／「東洋学」——内藤湖南・桑原隲蔵

日露戦争翌年の1906年9月、すなわち「国民の関心が大きくアジア全体に向けられていた時」に京都帝大文科大学が開設され、はじめに哲学科、一年後に史学科、二年後に文学科が逐次開講し、「その創設期からとくに東洋学研究を重視しようとした」（『京都大学文学部五十年史』、京都大学文学部、1956年）。

学科を編成する際に、学問の出発点として哲・史・文に大別するのか（すなわち史学科において日本史・西洋史・東洋史が並列する）、それとも研究対象となる地域ごとに大別するのか（すなわち各地域研究の一部門としてそれぞれに史学を置く）、という二つの方向性が考えられる。それにともない研究者も、歴史学の一部としての「東洋史」を重視する者と、地域研究としての「支那史」を重視する者との二つに分かれるようになる。京都帝大の場合、狩野直喜は当初、日本学・支那学・印度学のような分け方をし、支那学科の中に哲学・史学・文学という専攻を設定することを望んだ。しかし、最終的に、「東洋史」の名称にこだわりその独立を強く押す桑原隲蔵の意見が採用され、その後桑原の構想に沿った講座運営が継承された（礪波護『京洛の学風』中央公論新社、2001年）。結果として、新設の文科大学は哲・史・文の三学科制となり、史学科の中の東洋史学には三講座が設けられ、内藤湖南（第一講座、1907年）・桑原隲蔵（第二講座、1909年）・矢野仁一（第三

講座、1912 年）が相次いで迎えられた。

一括して「京都学派」とは言っても、例えば、桑原と内藤はかなり対照的な存在であった。桑原はしばしば中国在来の学風の不正確さを批判して、「中国人の学者は頭が悪い」とまで言い、「自分のやっていることは東洋史であって、シナ学とは違うものだ」と明言していたという（宮崎市定「桑原史学の立場」『桑原隲蔵全集』月報 6）。一方で、内藤の次男・耕次郎は父・湖南について「すきだったもの。支那のものならなんでもすきだった」と語っている（内藤耕次郎「人間湖南にかんする断章 その（三）」『内藤湖南全集』月報 12）。同じく「漢学」排除・実証重視であっても、西洋の科学的・実証的方法を徹底した桑原隲蔵から宮崎市定につながる学統（「東洋学」と、清朝考証学の実事求是の方法を主に吸収した内藤湖南・狩野直喜（「支那学」との二つの系譜が見られるのである。とりわけ、「唐宋変革」論を通じて語られた「宋近世説」は、スケールの大きい「内藤史学」の中核をなしており、「京都学派」の代表的な時代区分として後世に大きな影響を及ぼした。

このように、アカデミズムにおける「東洋史学」という専攻が最初に設置されたのは京都帝大であり（1907 年）、それは東京帝大（1910 年）より早いものである。東西両京の帝国大学における「東洋史学」の成立過程の違いは、それぞれ性格の異なる東洋史学を生み出した。

4、東京帝大の「東洋学」——白鳥庫吉

日露戦争が勃発した 1904 年に、東京帝大ではそれまでの「史学科」が分かれ、国史学科・西洋史学科・支那史学科の三つが独立し、白鳥庫吉が支那史学科の教授となった。「日韓併合」の 1910 年に支那史学科が東洋史学科と改称され、白鳥は同僚の市村瓚次郎とともに「東洋学」の基礎を固めた。

ヨーロッパ留学から帰国した白鳥は、ヨーロッパの「東洋学」への対抗心を一層強くして、日本の東洋学の振興に力を入れた。弟子の津田左右吉は下記のように回想している。

時は恰も三十七八年戦役に際し、東洋の指導者としての我が国の威力が、世界に向つて現実に示されつゝあつたので、学問に於いてもまた、一日も早くヨーロッパの学界と肩をならべるやうにならねばならぬといふ、かねてからの博士の意見が、それによつて一層強められ、その上に、東洋の研究に於いては、新しい学問的研究のまだ幼稚な支那の学界を指導すると共に、世界の東洋学研究に寄與すべきしごとをしなければならぬ、と考へられたのである。（津田左右吉「白鳥博士小伝」『東洋学報』29-3・4、東洋文庫、1944 年。）

1904 年に亜細亜学会、1907 年に東洋協会を立ち上げ、さらに 1908 年には満鉄総裁の後藤新平を説得して東京支社に「満洲及朝鮮歴史地理調査室」を設立するなど、東洋史学の発展に尽力した。その最初の動機について、白鳥はこのように語っている。

私は同じ東洋人である日本人が欧米学者の研究に負けぬやうに、大きな東洋歴史学会をつくつて、学者、実業家、政治家などが相提携して、根本的に東洋研究に努める必要のあることを提唱したのであつた。尤も当時欧米人の手に成る東洋方面の研究は、多くは支那、蒙古、中央アジアの研究で、その中には却々権威のあるものがあつたことは事実であるが、流石に満洲と朝鮮の研究には手をつけてゐなかつた。言はばこの方面の研究は未開拓のまゝ残されてゐた譯で、私はこゝに注意を向けた結果、欧米人の出来ない満洲、朝鮮の歴史地理の研究を我々日本人の手に依り完成しなければならないと思つたのである。（白鳥庫吉「満鮮史研究の三十年」『国本』14-9、1934年9月。）

学科分野の画定、学会の設立と機関誌の発行が実現された後は、研究資料の拠点も重要となってくる。1924年に「日本の東洋学のメッカ」を目標にして開設された東洋文庫がそれである。東洋文庫は、1917年に三菱財閥が一括して購入したモリソン（George Ernest Morrison）の蔵書を土台にしている。「モリソン文庫」の受託に携わり、その後の東洋文庫の運営に尽力した石田幹之助は白鳥の弟子である。また白鳥自身も理事として文庫の運営に携わり、1939年に理事長に就任した。

5、「東洋学／中国学」への反省——戦前と戦後の連続と断絶

古くから漢文で書かれた中国の書物に慣れ親しんだ日本人は、明治に入ってからヨーロッパの科学的・実証的な研究方法を取り入れた。それによって、中国史料の内容や正確性を精査した上で相当に緻密な研究を行ったため、日本の「東洋学」はたちまち世界的水準にまで達した。一方で、近代日本の「東洋学」の誕生と発展は、日清戦争・日露戦争などにともなう日本の勢力拡張と国威発揚とその歩みをともにしていた。その意味で、第二次世界大戦後、日本の「東洋学」のあり方が、主に学問と政治との二つの面から批判的に検証されてきたこともうなずけよう。

終戦直後から起こった「東洋学」に対する批判は、1960年代初め頃に一つのピークを迎えた。歴史分野での議論の焦点は二つある。一つは、戦前の「東洋史学」と、戦後に再建されたアカデミズムにおける「東洋史学」との間における連続と断絶の問題である。いま一つは、実証的な学問における政治に対する独立性の問題である。その中にはさらに、①日本の対外拡張との「共犯」関係、学問が「政策の学」になったこと、いわゆる「学問の政治化」への反省、②実証にこだわったがための学問と現実との乖離、学問の「純粹」性・普遍性・中立性・非政治性とはいかにあるべきか、いわゆる「学問のための学問」に対する批判的検証、という二つの論点が含まれる。

全体的に見れば、五十年代前半までの議論の多くは、革命運動が勝利を収めた新中国への礼讃と憧憬、過去の日本の大陸政策に対する批判と糾弾に集中し、戦前を克服することが要求された。その後、安保闘争やA・F資金問題（アメリカのアジア財団（The Asia Foundation）・フォード財団（Ford Foundation）から提供された現代中国研究の資金を東

洋文庫が受け入れるべきかどうかの問題）など時局の影響もあり、五十年代後半から六十年代にかけて学界の論調に変化が生じた。その結果として強調されたのは、戦前の批判的継承を前提とした、「脱政治化」の「実証史学」に潜む危険性への警戒と、研究者の主体的社会責任である。

「東洋学」を批判的に検証するこの頃の代表的な論考として、旗田巍「日本における東洋史学の伝統」（『歴史学研究』270、1962年11月）と小倉芳彦「東洋史学の戦後的課題」（『現代の眼』、1970年11月）が挙げられる。旗田はA・F資金問題は外患というよりも内憂なのであると喝破した。白鳥庫吉や池内宏、加藤繁、津田左右吉などの研究を取り上げながら、従来の東洋史学は「人間不在の考証的研究を正しい歴史学とみたところ」に大きな特色があるとし、思想と学問との分離の問題性を下記のように指摘している。

現実をはなれ、思想をすてることによって、日本の東洋史学は侵略体制のなかで学問の純粋性を守ろうとした。それはそれなりに相当大きな成果をあげてきた。しかし、他方において、現実との無責任な結合、権力への追随をもたらす危険性を多分にもっていた。それだけではなく、その成果には大きな制約があった。これまで日本の伝統的東洋史学がおさめた成果は個々の事実に関する考証が主であって、アジアの歴史の体系的な把握の点では著しく不十分であった。

現実から目をそらした精緻な考証史学は、一見したところ時勢に超然として政治との癒着がないようであるが、その実は「現実と研究との分離」は「両者の機械的結合」と同じであり、そこから「研究自体への反省は生れない」と旗田は言うのである。

また小倉は、北一輝、内藤湖南、白鳥庫吉、吉野作造などの中国論を振り返り、明治以来の日本におけるアジア（とりわけ中国）研究の姿勢と思想の問題を検討した。特に白鳥・内藤の指導を受けた中堅研究者については、「理論を排除した手堅い実証的学風」と評価する一方で、次のように指摘している。

しかし彼らは、朝鮮・中国その他のアジア諸地域を研究の対象としていても、少数の例外を除いては、自分の眼でアジアを見ようとはしなかった。いわば日本国家公認のアジア認識に身を委ねることが、彼らの実証を重んじる研究生生活を保障する手段となったのである。そして彼らは、実証的な研究態度を持していることで、時の政治から独立した学術研究をやっているという自信を抱いた。しかし彼らの政治からの距離は、国家官僚としての中性化にすぎなかったのである。（中略）政治とは離れた姿勢で学術研究をしていると本人は思っている、学術研究の中立性を自己過信するときには、たちまち政治の波間に足をすくわれてしまう。この典型を私は桑原隲蔵において見る。

旗田・小倉の他にもう一人見逃すことができないのは、一橋大学教授を務めた増淵龍夫

である。戦前の「東洋学」のあり方や A・F 問題に対して増淵が直接言及したものは限られているが、ある座談会での発言は考えさせられる。東洋史学における東西両京の差異について、京都の学者は清朝考証学の影響を強く受けたとする旗田の指摘に対し、増淵は次のように述べた。すなわち東京に西域史の学者が多いのでヨーロッパの東洋研究を非常に尊重しているわけであるが、地名考証が主となる西域史の研究は、ヨーロッパの学問精神をどこまで受け継いでいるのか疑問である、むしろ受け継いだのは中国蔑視の視角ではないか、したがって、日本の中国政策や日本人の中国観に対して何らかの訂正をしていくような働きは出てこなかったと言うのである（衛藤瀋吉・旗田巍・野原四郎・増淵龍夫「座談会 日本人の中国観と中国研究」『世界』210、1963 年）。

そして、津田左右吉と内藤湖南との文化観を比較した増淵の論考も注目すべきである。増淵からみれば、津田は「国民史的観点」から日本人の実生活への中国文化の影響を否定し、日本文化の独自性を強調して、中国蔑視の立場に立った。津田の問題関心の根源は「近代主義」および日本の西洋化にある。一方、内藤は「個々の民族を超えた「文化」史的観点」から中国文化を高く評価し、中国の現在と未来を歴史的・内在的に把握しようとした。その意味で、津田の中国文化批判は「一面的な外在的批判」に終わったのに対し、内藤の文化論は「内在的な歴史理解」に基づくものだったと評価している。ただし、「やがて日本の中国侵略の進行とともに高まってくる中国の民衆の民族主義的抵抗を、湖南は正しく理解できず、その抵抗のもつ歴史的必然性を軽視することになる」と、内藤の矛盾についても指摘している。結論として、「中国の人々の主体的な民族意識」を正しく捉えることができなかったことが、津田と内藤の共通点であると増淵は見るのである。（増淵龍夫「日本の近代史学史における中国と日本（Ⅰ）（Ⅱ）」『思想』462、468、1963 年）。

増淵は東大の「東洋学」にも京大の「東洋学」にも属さず、ドイツ中世経済史から中国古代史に転向した異色の経歴の持ち主である。しかし、こうした経歴こそが、歴史事象を冷徹に分析する外部的視角と、内部に立ち入って鋭く批判する立場を増淵に与えたのかもしれない。その意味でおそらく増淵は、仮に津田・内藤と同じ時代に生きて海の向こうの中国を考察したとしても、袖手傍観の津田とも役に入りすぎた内藤とも決定的に異なる立場をとったであろう。

言うまでもなく戦後の東洋史学に問題がないわけではない。例えば、増淵のいう「内面的理解」について、当代の学者から次のような指摘がある。

中国の愛国主義に自己同一化するというだけでは、そこに内在する権威性をそのまま受け入れることになってしまう。そのような批判的理性の欠如は、今度は戦後日本の中国史研究から学ぶべき教訓ではないか、外部の者による「内面的理解」が果たして可能かと問うことをやめて、外側からの冷静な視点が大切だと積極的にいうこともできる。（吉澤誠一郎『愛国主義の創成——ナショナリズムから近代中国をみる』岩波書店、

2003 年。)

では、対象国に対して歴史家が同時代史的考察を行う際に、政治現象に対する冷静な分析と歴史に対する内在的な理解は果たして両立できるのか、また、もしできるならいかに両立させるのだろうか。これは旗田や小倉、増淵など戦後の東洋史学の先達たちが提示し、そして依然として実現できていない目標である。われわれもこの方向に向かって模索しつつある。

6、内藤湖南とその周辺

23 名の学者に寄稿していただいた朱琳編著『近代日本の中国学の光と影』（勉誠出版、2024 年夏頃出版予定）が近いうちに刊行される予定である。目次（仮）は下記の通りである。

序説 目次 略年表 総論 「シナ通」と「中国知」 近代日本の中国論の系譜	第三部 日中書画交流 富岡鉄斎（1837～1924） 長尾雨山（1864～1942） 山本竟山（1863～1934）・河井荃廬（1871～1945） 瀧精一（1873～1945）・金原省吾（1888～1958）
第一部「東洋史」と「支那学」の確立 那珂通世（1851～1908）・桑原隲蔵（1871～1931） 白鳥庫吉（1865～1942）・内藤湖南（1866～1934） 服部宇之吉（1867～1939）・狩野直喜（1868～1947） 矢野仁一（1872～1970） 鈴木虎雄（1878～1963）	第四部 アジア踏査 鳥居龍藏（1870～1953） 関野貞（1868～1935）・常盤大定（1870～1945） 大谷光瑞（1876～1948） 水野梅曉（1877～1949）
第二部 中国研究に新風を吹き込む 青木正児（1887～1964） 宮崎市定（1901～1995） 吉川幸次郎（1904～1980） 目加田誠（1904～1994）	第五部 ジャーナリストの目に映った中国 辻武雄（1868～1931）・村田孜郎（？～1945）・波多野乾一（1890～1963） 橘樸（1881～1945） 太田宇之助（1891～1986）・尾崎秀実（1901～1944） 橋川時雄（1894～1982）
	あとがき

ここで、歴史学分野の「京都学派」の創立者の一人とされる内藤湖南を中心として、師弟関係・交友関係を含め、日本における「東洋学」／「中国学」の成立・発展にかかわる個性豊かな学者（京都帝大の関係者を中心とする）を略伝の形で簡単に紹介しておく。日清戦争（1894-1895 年）が勃発する明治二十年代に産声を上げ、政治上・軍事上のアジアへの拡大とともに、日本の東洋学は中国史だけでなく、西域史や塞外史、モンゴル史など辺境地域史にも熱い視線を注いでいた。この意味で、この考察は、近代日本にとってアジアとは何であったのか、自己認識と他者理解、実証と時論、学問と政治などの問題を理解する上での一助となろう。

・内藤湖南 (Naito Konan 1866-1934)

内藤湖南は日本東洋史学の創始者の一人として名を知られる。本名を虎次郎といい、旧南部藩の鹿角郡毛馬内（現在の秋田県鹿角市十和田毛馬内）に内藤調一（号、十湾）と容子の次男として生まれた。内藤家は南部藩の重臣桜庭家に仕えた士族であり、容子の実家泉沢家とともに儒者の家柄である。虎次郎の名は、寅年生まれであったことにあわせて、調一が尊敬していた吉田松陰（1830-59）の通称寅次郎にあやかったという。また、字は『易』の革卦に「大人は虎のごとく変ず、その文は炳なり」とあるのによって炳卿とし、号は毛馬内の地が十和田湖の南に位置するため湖南と称したという。湖南の生涯を時期的に大きく区分すると、二十年ごとに一つの区切りを入れることができる。すなわち、秋田で幼少時代を送っていた最初の二十年、1887 年に上京してジャーナリストとして活躍した二十年、1907 年にアカデミズムに転身し中国史研究で権威を確立した二十年である。

湖南は五歳から習字を始め、その後、父に漢文や漢詩を教わり、漢学の素養を身につけた。『論語』・『孟子』のほか父が傾倒した頼山陽の『日本外史』も読んだ。少年湖南は漢文の力が抜きん出ており、1881 年明治天皇の東北・北海道巡幸の際に漢文で作った奉迎文が天皇の侍講元田永孚を感嘆させたほどであった。1885 年に秋田師範学校高等師範学科を卒業し、北秋田郡の綴子小学校で首席訓導（事実上の校長）を義務年限の二年務めた。

1887 年に上京した後、湖南は知遇を得て『明教新誌』、『万報一覧』、『大同新報』、『江湖新聞』、『三河新聞』、『日本人』（後に一時期『亜細亜』に改題）、『大阪朝日新聞』、『台湾日報』、『万朝報』の編集あるいは主筆を務めた。その間、湖南は幾たびも中国に赴き、絶えず同時代の中国の動向に熱い視線を注ぎ、あるべき中国の姿や日本の対中政策について健筆をふるって提言し続けた。

1907 年に京都帝国大学文科大学長狩野亨吉の抜擢で、湖南は同東洋史学第一講座担当教官（当初は講師、二年後に教授）として招かれた。大学人となった湖南は、長年の蓄積を傾注して雄大かつ独創的な東洋史の体系を作り上げることに努める。1926 年に定年退官した湖南は、翌年、京都府相楽郡瓶原村（現在の木津川市加茂町）の恭仁山荘に転居した。そこは交通が不便であるにもかかわらず、学者や政客が頻繁に訪れ、人力車が繁昌するほどであった。1934 年 6 月、一代の学匠はその波瀾に満ちた生涯を閉じた。

湖南は生涯を通じてつねに熱い視線を同時代の中国に向け、改革の可能性や方法、担い手などについて積極的に発言し続け、その姿勢はジャーナリストから大学教員に転身した後にも貫かれた。広く読まれた彼の『支那論』において、湖南は中国史を踏まえながら、1911年の辛亥革命で滅んだ君主独裁政治は宋代に始まったものであり、それ以前は貴族政治の時代であったことを明らかにし、「唐宋変革、宋代近世」説を唱えた。そして、宋代以降の社会の各方面における近世的発展のなかで見られた庶民の台頭（「平民主義」）、地方自治の伝統（「郷团组织」）こそが共和制の基盤たりうるとし、一種の「聯邦共和制」をあり得べき政体とした。また湖南は、西洋を「文明」の頂点として中国などを立ち遅れた存在と見なす議論に異を唱え、中国こそ他国に先んじて進んだ早熟した文化の持ち主なのであり、中国の現状はむしろ世界の将来を暗示していると認識している。

刊行がいずれも没後であった『支那上古史』（1944年）、『支那中古の文化』（1947年）、『支那近世史』（1947年）、『清朝史通論』（1944年）の中国史四部作に、『支那論』（1914年）・『新支那論』（1924年）、京都帝大での特殊講義をまとめた『支那絵画史』（1938年）・『支那史学史』（1949年）を加えて湖南の業績を概観すると、それは古代から現代に至るまでの一体の中国通史をなしており、そこからは湖南の独特の着想と史観の全貌を読み取ることができる。

湖南の代表的な歴史観として、「天運螺旋循環説」、「文化中心移動説」、「唐宋変革、宋近世説」の三つがある。湖南はすべてのものが直線的に発展するという進化論の説に賛意を表しながらも、それで何もかも説明され得るとは信じず、歴史の性格を「環形」あるいは「直線」と規定するのはどちらも一面的であるとする。湖南はこの両者の調和をはかることに努め、あたかも「循環」のように見える歴史の「進化変遷」の動きを「天運螺旋循環説」として解釈した。

そして、「政治」と「文化」を分けて歴史の発展を考察し、「政治」の中心と「文化」の中心はいずれも時代とともに移動するとはいえ、必ずしも一致するとは限らないと考える。とりわけ「文化」の中心は「地勢」と「人文」の変化によって移動し、場合によっては民族や国家を超えることも可能であり、最終的に「東洋文化」の中心が日本へと移動していくと主張するのである。

湖南の「唐宋変革、宋近世説」という時代区分論は、欧米でも「内藤仮説 (Naitō Hypothesis)」としてよく知られている。湖南は「唐宋変革」の指標として「①貴族政治の廃頽と君主独裁政治の代興、②君主の位置の変化、③君主の権力の確立、④人民の位置の変化、⑤官吏登用法の変化、⑥朋党の性質の変化、⑦経済上の変化、⑧文化の性質の変化」を挙げ、唐宋の間に中国の社会・文化が一大転換を遂げたと見なす。そして、清末の中国につながる政治的・社会的・文化的要素はすでに宋代の時点で形成されており、宋代以降が中国の近世であると結論付ける。君主独裁政治の強化と「平民主義」の台頭を特徴とする湖南の「宋代近世説」が独特なのは、それが辛亥革命後の中国に直接つながっている点である。このように湖南の歴史研究は同時代の中国の時局論的分析から出発し、学術

的考察へと深められていったものである。湖南の唱えた中国「宋代近世説」はのちに宮崎市定らに受け継がれ、「京都学派」の時代区分論として現在では世界的にも有力な説となっている。

総じて言えば、「天運螺旋循環説」を時間軸とし、「文化中心移動説」を空間軸とするならば、湖南の行なった時代区分はまさにこの時間軸と空間軸をつないだ上で成立したのである。

・矢野仁一 (Yano Jinichi 1872-1970)

山形県米沢生まれ。早く親を亡くし、後に大審院判事となった伯父を頼りに駿河台の成立学舎で学び、第一高等学校を経て、帝国大学文科大学西洋史学科に進学した。「露清関係、特にネルチンスク条約について」と題する卒業論文を執筆し、卒業後大学院に進学した一方で、早稲田大学と日本大学の講師を務めた。1905年に清朝学部の招聘により進士館教習、1907年に京師法政学堂教習になり、近世政治史や政治地理などを教えた。辛亥革命後、1912年に帰国してすぐ京都帝国大学助教授となり、東洋史学第三講座を担当、内藤湖南（第一講座）、桑原隲蔵（第二講座）とともに草創期の東洋史学の一翼を担った。1931年の満洲事変を契機に、「満洲はシナの領土に非ず」、「支那は国に非る論」を大いに主張し、満洲に「王道楽土」の夢を描いて満洲国建国のイデオログとされたが、戦後に公職追放の処分を受けた。著作に『近代支那論』（1923年）、『日清役後支那外交史』（1937年）、『東洋史大綱』（1938年）、『大東亜史の構想』（1944年）、『中国人民革命史論』（1966年）などがある。

・青木正児 (Aoki Masaru 1887-1964)

山口県赤間ヶ関（今の下関市）生まれ。子どもの時から『唐詩選』や『孝経』、『論語』など中国の古典を学んだ一方で、音楽や絵画にも大きな興味を示した。福岡の豊津中学校、熊本の第五高等学校を経て、1908年に京都帝国大学文科大学支那文学講座の第一期生として入学。狩野直喜、鈴木虎雄などの講義を受け、「元曲の研究」と題する卒業論文を執筆した。卒業時に進路に迷い、なぜ日本人として中国文学を研究するのかと自問したが、日本人による研究は新分野の開拓を特に重視すべきだと認識してからは自らそれを実践し、多くの独創的な研究を生み出した。1920年に小島祐馬・本田成之とともに雑誌『支那学』を創刊し、中国の新文化運動に注目して「文学革命」をいち早く日本に紹介した。1923年に東北帝国大学に赴任したが、青木はその後十五年間にわたる仙台生活を振り返り、「隠遁者に等しい」生活で、最も落ち着いて読書できた時期だったと述懐した。多くの先駆的な研究を世に問うたのもこの時期であった。1938年に母校の京都帝大に転任し、明清時代の中国文学を中心に講義を行いながら、仙台時代の研究を整理し、まとめて出版した。文学のみならず、中国の書画・音楽にも造詣の深い青木は、「文芸」という広い視点で文学史の再構築を試みた。また、1925年に文部省の在外研究員として北京に滞在した時、失わ

れつつある古い北京の姿を記録するために、地元の絵師に庶民生活のなかの代表的な場面を描かせ、『北京風俗図譜』を作成した。さらには、新文化運動の一環をなす歌謡運動を訳書『支那童謡集』の形で日本に紹介したり、晩年には中国の食品や器物の歴史に興味を抱いて「名」と「物」との関係を実証的にすることを試みたりもした。著作に『支那近世戯曲史』（1930 年）、『支那文学概説』（1935 年）、『支那文学思想史』（1943 年）、『清代文学評論史』（1950 年）、『中華名物考』（1959 年）などがある。

・吉川幸次郎 (Yoshikawa Kojiro 1904-1980)

日本における中国文学研究の権威とされる。字は善之。華僑が多く居住する神戸の貿易商の家に生まれ育った。幼少の時から文学を愛好し、兵庫県立第一神戸中学校・第三高等学校を経て京都帝国大学文学部文学科に進学。中国文化に惹かれ、ついに中国研究の道を歩むようになった。

1920 年 9 月に雑誌『支那学』が青木正児・小島祐馬・本田成之の三人により創刊され、中国の文学革命の最新動向がいち早く日本に紹介されるようになった。吉川はただちにその愛読者となり、殊に青木の論文に感銘を受け、1921 年の夏に初めて青木を訪問しその知遇を得た。青木の助言にしたがい翌年の春から留学生について中国語を学び始め、同じ年に三高で鈴木虎雄（当時京都帝大教授）の漢文の授業にも出た。三高時代の最後の春休みに初めて中国に渡航し江南地方を二十日間ほど観光し、江南の美しい風物を後年になっても繰り返し語っている。

京都帝大入学後は、同大学教授の狩野直喜、鈴木虎雄らの指導を受け、『倚声通論』（漢文）を卒業論文として提出し、大学院に進学してからは唐詩を研究題目に選んだ。1928 年 4 月に狩野に随行して北京に留学。東城演樂胡同の延英舎に寄宿し、同宿に倉石武四郎らがいる。倉石とともに北京大学の聴講生となり馬裕藻・錢玄同・沈兼士・朱希祖らの教授の講義を聴いたほか、中国大学では呉承仕教授の講義も聴いた。また、個人的に楊鐘羲の指導も受けた。暇なときには隆福寺・琉璃廠へ遊びに行き、書籍などを収集した。1931 年 2 月に留学を終える前に江南地方を再度遊歴し、その間黄侃・張元濟らにも面会している。

帰国後、大学院を退学し外務省所管の東方文化学院京都研究所（所長は狩野直喜。1938 年に東方文化研究所と改称。現在の京都大学人文科学研究所）所員となり、文学部の講師を兼ねた。当時は倉石とともに日常的に長袍（当時の中国の服装）を着用して街を歩き、ときおり中国人に間違われた。1937 年 12 月、日中戦争の最中に小島祐馬とともに北京に赴き、周作人に初めて会う。同僚との協力で『尚書正義定本』（全四冊、1939 年-1943 年）を刊行させた。1947 年 4 月、論文「元雜劇研究」により文学博士の学位をとり（同名書籍は翌年 3 月に岩波書店より刊行）、6 月に退所して文学部教授に就任、以降二十年間中国語学中国文学第一講座を担当した。

吉川は清朝経学の緻密さに傾倒し、その方法を文学研究にも適用した。その研究は、『論語』などの古典から詩・散文・小説・戯曲にいたるまでほぼすべてのジャンルにわた

り、中国文学の伝統を長く広く把握し、その歴史と美の真実を伝えようとするものだった。さらに、作品の翻訳・注釈のほか、言語・思想・歴史にも論及し、研究を多面的に展開している。吉川はその人間性をよく表すエッセイや漢詩も多数執筆し、中国文化から断絶しようとする社会風潮のもとで、論理的で歯切れのよい文体で多くの一般人を中国文学の愛好者に変えさせた。後年には、自らの手で『吉川幸次郎全集』（20 巻、補巻 4 巻、1968－70 年）を編むほどの精力ぶりを発揮している（最新の『全集』は本篇・補巻に続補 3 巻、索引 1 巻を加え、計 28 巻となっている）。

吉川は中国留学の際、芝居を見ない、料理の名前を覚えな、と思い定めて北京に乗り込んだという。吉川は中国文化を愛さないわけではないが、中国文化への深い理解を持たない上辺だけの趣味的中国通には嫌悪感を抱いたのだろう。「町の儒者」と自らを規定し、後年江戸の儒者（伊藤仁斎・伊藤東涯・荻生徂徠・新井白石）の研究も行った。友人との会話のなかでは「貴国（おくに）」（日本を指す）・「わが国」（中国を指す）という言葉を使い、理念の中にあり続けている儒教文明の国への憧れを表している。

「私は杜甫を読むためにこの世に生まれて来たのであることを願う」と吉川は言う。1967 年 2 月、「杜甫の詩論と詩」という題目で文学部最終講義を行った。停年退官のころから杜詩を読む「読社会」（1979 年 6 月まで続き、計 118 回）、若い学生とともに杜詩を読む「小読社会」（ほぼ同じ時期まで継続）を発足させ、長年継続した。さらに晩年、1400 首あまりも存する杜甫全詩の細密きわめる訳註を目指す『杜甫詩註』20 巻の刊行を予定していたが、結局 3 巻（1977 年 8 月、1979 年 1 月、7 月）までの刊行にとどまり、未完に終わっている。1980 年 4 月 8 日に逝去。

・神田喜一郎 (Kanda Kiichiro 1897-1984)

京都市上京区生まれ。漢学に造詣が深く書画の鑑識にも長けていた祖父の影響もあり、幼少の時から漢籍に親しみ、中国の歴史や文化に興味を持つ。京都府立第一中学校・第三高等学校を経て 1917 年に京都帝国大学文学部史学科に進学し、内藤湖南に傾倒した。大学卒業後、すぐに大谷大学に着任するも 1926 年にいったん辞任。4 月より宮内省図書寮の嘱託となり漢籍目録解題の編纂を担当し、目途がついた後に大学に復帰、図書館の漢籍図書の実に尽力した。1929 年に、学部長の藤田豊八の斡旋で台北帝国大学に赴任する（～1945 年 12 月）。1930 年の夏に上海へ行って魯迅に会い、『遊仙窟』や『三蔵法師取経詞話』などについて意見を交換した。1934 年 12 月に、台湾総督府在外研究員としてフランス・イギリスに留学し、日本で紹介されていないペリオ文書の一部を撮影し、敦煌写本の研究などを行っている（～1936 年 8 月）。その後幾たびか職場を変えたが、大阪市立大学時代、内藤湖南の旧蔵書の一部を購入し、「内藤文庫」を設立した。1950 年に『日本書記古訓攷證』（1949 年、養徳社）で博士号をとり、清朝考証学の成果を参照しながら日本書記の古訓が中国の古い訓詁に基づいたものであることを精緻に実証した。1952 年には京都国立博物館長に就任し、その尽力で守屋コレクション・上野コレクションがこぞって同館に収め

られた。著書に『敦煌学五十年』（1960 年）、『東洋学文献叢説』、『書誌学論集』などがある。また、大阪市立大学時代の同僚でもある内藤乾吉（内藤湖南の長男）に協力して『内藤湖南全集』（筑摩書房、1969 年-1976 年）の編集を完成させた。

・貝塚茂樹 (Kaizuka Shigeki 1904-1987)

地質学者・地理学者として大成した小川琢治（1870-1941）の次男として東京に生まれる。4 歳のとき父親が京都帝国大学文学部史学科教授に転任し、一家で京都に移住した。幼少のとき祖父より漢籍の素読教育を受け、小学校の間に四書五経や『左伝』・『十八史略』・『唐宋八家文』などを読み終えた。兄に小川芳樹（1902-195 東大教授・金属工学者）、弟に湯川秀樹（1907-1981 京大教授・物理学者、日本人初のノーベル賞（物理学賞）受賞）と小川環樹（1910-1993 京大教授・中国文学者）がおり、学者一家の「小川兄弟」としてよく知られる（貝塚という姓は妻の実家に養子入りして改姓したもの）。

父の同僚や友人には、狩野直喜・内藤湖南・桑原隲蔵など京大中国学の黄金時代を築いた錚々たるメンバーがそろっていた。貝塚は少年時代より彼らの家に入出入りし、辛亥革命後京都に亡命した羅振玉・王国維にも近距離で接するなど、豊かな学問的環境の中で薰陶と感化を受けつつ成長した。とはいえ、貝塚は最初から中国研究を目指したわけではない。西洋史を選ぶか、もしそれが許されなければ経済学部にも転向しようとする彼の考えに父親が気づき、東洋史を専門とするよう強圧を加えたようである。父親の厳命のもとで旧制高校時代から好きだった西洋学を捨て、嫌でたまらなかった漢学に身を投じ東洋史を専門に決めたと後年に回想している。

京都府立第一中学校・第三高等学校を経て京都帝国大学文学部史学科に進学、1928 年に大学院に進み、1932 年に東方文化学院京都研究所（1938 年に東方文化研究所と改称。現在の京都大学人文科学研究所）研究員となった。1968 年の停年退官までここが貝塚の研究の場所となった。『中国古代史学の発展』（弘文堂、1946 年。1947 年に朝日文化賞）、『諸子百家』（岩波新書、1962 年。同年に毎日出版文化賞）などの著作があり、後に『貝塚茂樹著作集』（全十巻、中央公論社、1976 年-1978 年）が刊行された。1987 年 2 月 9 日に逝去。

貝塚の研究を大別すると、甲骨文や金文の研究と、比較史の視点からの中国古代都市国家の研究との二つに分けることができる。前者は『京都大学人文科学研究所蔵甲骨文字』（図版冊・本文篇・索引 1959 年-1960 年、1968 年）に結実した。また、後者の研究の集大成として『中国古代の国家』（『貝塚茂樹著作集』第一巻）がある。

前者の研究は、黒川（幸七）コレクションと上野（精一）コレクションの寄贈を受けた貝塚が、実際の甲骨文を直に細かく観察し、解読することで進められたものである。両コレクションのうち偽刻を除いた 3246 片を自らの時代区分に基づいて分類整理し、『京都大学人文科学研究所蔵甲骨文字』を刊行させた。董作賓のト辞断代説を揺るがした直接的な資料もその中に含まれ、ト辞学を大きく前進させた。一方で、後者の研究の成果である

『中国古代の国家』は、ギリシャ・ローマの古代都市を念頭に置きながら、中国の古代国家の変遷を歴史的にたどり、時代的性格によって「殷周時代の古代国家」と「春秋時代の都市国家」との二つに区分することで、中国的古代都市の全体像を構築しようとした研究である。比較史の視点から、文献資料だけでなく、卜辞・金文など利用可能な資料をすべて駆使し論証を進めたところにこそ貝塚史学の特徴がある。

・小川環樹 (Ogawa Tamaki 1910-1993)

地質学者・地理学者として大成した小川琢治 (1870-1941) の四男として京都に生まれる。兄に小川芳樹、湯川秀樹、貝塚茂樹がいる学者一家である。幼少の時から祖父に『大学』・『論語』・『孟子』・『孝経』から『十八史略』にいたるまでの漢文の素読の指導を受け、有朋堂文庫の『三国志』・『水滸伝』・『西遊記』などを兄弟で競うように読んでいた。兄弟のなかで、環樹が最も漢学が好きで、父親が彼を最もかわいがっていたという。小学校で一年、中学校で一年と二回飛び級をし、京都府立第一中学校・第三高等学校を経て京都帝国大学文学部文学科に進学した。兄・茂樹の助言で中国文学を専攻し、「儒林外史の形式と内容」という卒業論文を書いて大学院に進学した。

1934 年から 2 年間、中国に留学した。はじめは北京大学・中国大学の聴講生となり、趙元任に面会し、胡適の勧めで羅常培の授業に出た。その後、蘇州語の学習のために蘇州にも滞在し、1936 年 1 月に上海の内山書店で談話中の魯迅と今関天彭に邂逅した。1938 年に東北帝国大学法文学部の講師となり、その後 12 年間仙台で教鞭をとった。同僚に武内義雄・岡崎文夫などがある。1950 年 7 月に京都大学文学部教授に転任し、以降 1974 年の停年退官まで中国語学中国文学第二講座を担当した。

小川の研究は語学研究と文学研究とに大別できるが、その実は語学を基礎とした文学研究にこそ小川の研究の特徴がある。後年の回想では、倉石武四郎の講義を聞いていったん諦めていた中国語学への関心がにわかに高められたという。吉川幸次郎とは対照的に小川は方言研究が好きである。高弟のノートをもとにした『小川環樹中国語学講義』(尾崎雄二郎筆録・高田時雄編、臨川書店、2011 年)に「中国語方言学史」という講義が収録されている。

一方の文学研究では、詩と小説がその中心となっている。『中国詩人選集』(吉川幸次郎と共編、岩波書店、1957 年-1959 年)・『中国詩人選集二集』(同、1962 年-1963 年)および『中国小説史の研究』(岩波書店、1968 年)がその代表である。1950 年代以降、小川の研究は唐詩・宋詩に傾斜し、晩年は吉川幸次郎の「読社会」に倣って蘇軾の詩を読む「読蘇会」を開催し、その後『蘇東坡詩集』(全四冊、共著、筑摩書房、1983 年-1990 年)を刊行。さらに、1986 年 5 月に蘇軾の足跡をたどるために三峡を下る旅をした。小川の小説研究は、単に小説内の作品世界を分析対象とするのではなく、社会と文学を結びつける仲介としての小説の役割に注目しているところが大きな特徴とされる。

なお、同僚や弟子とともに一般向けの入門書(『漢文入門』など)や訳書(『三国志：通

俗演義』など）の刊行にも携わった。また、『小川環樹著作集』（全 5 巻、筑摩書房、1997 年）が刊行されている。

主要参考文献

（※報告書の性格を鑑み、注を省略し、全体的に参考にした文献のみ列挙しておく。）

- ・今谷明ほか編『20 世紀の歴史家たち』（1）、（2）、（5）刀水書房、1997 年、1999 年、2006 年。
- ・小倉芳彦『吾レ龍門ニ在リ矣——東洋史学・中国・私』龍溪書舎、1974 年。
- ・江上波夫『東洋学の系譜』（1）、（2）、大修館書店、1992 年、1994 年。
- ・学習院大学東洋文化研究所編『知識は東アジアの海を渡った——学習院大学コレクションの世界』丸善フラネット株式会社、2010 年。
- ・岸本美緒編『「帝国」日本の学知 3 東洋学の磁場』岩波書店、2006 年。
- ・五井直弘『近代日本と東洋史学』青木書店、1976 年。
- ・礪波護ほか編『京大東洋学の百年』京都大学学術出版会、2002 年。
- ・旗田巍「日本における東洋史学の伝統」『歴史学研究』270、青木書店、1962 年 11 月（幼方直吉ほか編『歴史像再構成の課題——歴史学の方法とアジア』御茶の水書房、1966 年）。
- ・増淵龍夫『歴史家の同時代史的考察について』岩波書店、1983 年。
- ・吉川幸次郎編『東洋学の創始者たち』講談社、1967 年。

【謝辞：本研究は公益財団法人 JFE21 世紀財団「アジア歴史研究助成」より多大なるご支援をいただきました。この場を借りて深く御礼申し上げます。】